

学校研究の充実による学校力・教師力の強化

大阪市立大学・木原俊行

1. はじめに

我が国の教師たちは、世界に誇るすぐれた専門職文化を築いている。⁽¹⁾それは、自らの力量を高めるために時間と労力を惜しまないとする姿勢と風土である。教育センター等による行政研修の体系、教師たちが自主的に運営するサークル活動の数、民間教育団体等が催す大小のセミナーや研究会の種類などに象徴される。

それらに加えて、我が国の教師たちは、さらに豊かな実践的研究活動を繰り広げている。それが、各学校において教師たちが、同僚性を基盤として取り組む、「学校研究」である。校内研修、校内研究とも呼ばれてきた営みである。

学校力・教師力の強化は、この学校研究の充実に係っている。今日学校は、教育改革の波にさらされている。それに溺れないために、むしろそれに上手に乗るために、教師たちは、学校を基盤とする実践研究を進展させる志向性を強めるべきだ。本小論ではまず、そうした学校研究の今日的意義を再確認する。次いで、その今日的展開のポイントを解説する。

2. 学校研究の今日的意義

教職は、本来、創造的な仕事である。教師たちは、授業で、そこにおける子どもとの関わりを通じて、創造の喜びを実感できるはずだ。

しかしながら、現在、例えば子どもたちの安全確保とか、

コンピュータやインターネットの維持管理などの仕事に、教師たちは忙殺されている。それらが不要なことだと言っているわけではない。子どもたちの学校生活を落ち着いたもの、豊かなものにするために、もちろんとても大切なことではある。けれども、そうしたことにやりがいを感じて教職を目指した人は、そう多くはいないだろう。ほとんどの教師は、授業という舞台での子どもの成長に関わりたくて、教職を志したに違いない。

学校研究の企画・運営によって授業のあり方を追究する機会が保障されるならば、教師たちは、その思いを満たすことができる。今日、多様な教育課題に向き合う教師たちにとって、学校研究は、教職の本質を再認識させてくれる、その喜びを再度実感させてくれる、貴重な機会なのである。

同時に、今、学校には、いわゆる「説明責任」を果たすことが要請されているし、「特色ある学校づくり」が期待されてもいる。それらへの対応にも、学校研究は役立つ。よりよい授業を追究する教師たちの研鑽は、彼らが子どもたちの学力の向上に真摯な姿勢で取り組んでいることの証となる。また彼らは、授業のあり方をめぐる議論や調査を通じて、学校としての実践の独自性や課題を発見できよう。

3. 授業研究会の充実に向けた工夫

もちろん、上述したような学校研究の可能性は、そのシンボルたる授業研究会の企画・運営に工夫がないと、夢に終わろう。それについても言及しておこう。

最近、研究授業後の協議会に、「ワークショップ」など能動的な活動を導入し、教師たちが積極的に意見を交換する仕組みを取り入れる学校が増えている。⁽²⁾

特に学力向上など、多様なアプローチが可能であり、また各学校の特色を生かした実践が期待される場合には、授業やカリキュラムについて、教師たちが、自校に固有なアプローチを同定しなければならない。それは、授業者をいたずらに非難するだけの質疑応答とか、だらだらと続く指導助言から成る授業研究会では実現しない。参加者全員が主体的に、また具体的に授業についての知識・技術・信念を共有化するような仕掛け、環境、手順を備えた授業研究会の成立が期待されよう。

4. 公開研究会の開催等による実践研究の外部評価

学校研究は研究活動なのだから、その過程や成果に対す

る外部評価を十分に受けることができるようにすべきだ。その1つが、「研究発表会」の開催である。前述した「説明責任」、さらには「開かれた学校」づくりの観点からも、今日、教師たちは、研究発表会を開催して、授業に関する外部評価を受ける機会を用意すべきであるし、そのプログラムをこれまでも増して緻密にデザインすべきである。

例えば、公開授業のレポーターについて、十分な吟味が不可欠だ。学校研究は学校という組織における、教師たちの共同研究なのであり、研究発表会はその過程や成果を実践的に提案する機会なのであるから、個々の教師や学年がバラバラに授業を構想するのは、得策ではない。学校研究の全体像が公開授業のレポーターに反映されるように、そのラインナップに配慮する必要がある。「コミュニケーション能力」の育成に関する取り組みの研究発表会であれば、それに直結することが誰の目にも明らかな国語科や英語科の授業だけでなく、他教科等でコミュニケーション能力を育てている教室もできれば公開してもらいたい（もちろん、その前提として、研究発表会までに「コミュニケーション能力の育成」を複数の教科を対象領域にして実践していることが大前提となるが）。

5. 異校園種の教師等との共同

学校研究では、他校と共同的な関係を築いて展開されることも望まれる。自校の実践の独自性や発展可能性は、他校の教師と授業やカリキュラムについて語り合うことによって確認しやすくなるからである。

学力向上に対する社会的要請等から、現在、複数の学校による共同研究の1形態たる、異校園種の教師の連携による授業改善、カリキュラム開発が脚光を浴びている。そして、例えば小学校と中学校の教諭による協力教授、カリキュラムの配列や系統の再構築などが試みられている。学校研究は、校内に閉じられたものではない。その過程にいかにか重層的に研究的ネットワークを構築できるかによって、その成果が大きく変わってこよう。

注

(1) 佐藤学(1989)『教室からの改革』国土社

(2) 木原俊行(2004)「研究授業の実施と結果の活用」、木原俊行編『[学習指導・評価]実践チェックリスト』教育開発研究所